



新町
評林
廓中一覽
全

76
1532



門ヲ邊6
指1532

本十

東海

陽明

鄭中一覽序

鄭中一覽る黒江國の述作にして其
 行はるる津標り漏腹を浦に定ん鄭中
 幸銀をあたふるる者 徒も其に誤る
 物うはひつ物不燭存の存びを僻之とて
 扱ふ思ふ人々すして病人の苦悩治す

1

一も又はたねを捨てて亦傾圮の面を以て托
たつせうく おりうり
 里の味を割る海を境と設く夫傾城を殊
こしこ かいかい せう
 かにせむとて是石のいふかとかは是は代
いふかよ
 中なるも盡すの敷くもてお捨るは法所
しん せう
 虚実ををなす針のいふて沈むる実
こころいふつ せん
 ちねだかりの船の大きして浮むる虚を以て

かりこれを忍書の實と傾城の虚を以て実
しのびづ
 のを以て虚を以て実と云ふは實の差
しん
 ばつち姑く後を首を以て娘を解る
うま
 實を以て虚を以て実乃至傾城の虚を以て
いふ
 實を以て方便と寓言と譬を以て以て
かべん ぶんげん へい
 有半思ひぬむは人を以て時と運と

云々一列子曰財以而人分是通云々
まろしのかんきん
 通也醉心格重の死活有の之併値其高
ゆうじん
 情も貴權も押も次妓室を物の数も七次是
しやけん
 ちも思量たし亦烟花の面もと所成も
おもひ
 これを知らずと等々と成これを知る者もこれを
しら
 好ま者もふと志所是を好ま者も亦是を樂
たのしみ

者ふら志く成るも貪うして無理小たの
あきら
 方は北と唯身不兼ど何の之蓋子路も各
たけしん
 此を中ちげや真我真きり南方の真我北
まご
 方の真我抑難北の真我兼用有るを世く
まご
 陽定た否世れと南方の真ふ己弦曲とす
けんきう
 寝中一醒ち二諾ふれと北まは真なり真
まご



式真まう酒はくくく七第と否亦不
 俟其中を執る者郭中ら真あり蓋は
 真漬様ぞんや夫天定ら重の客酒ら
 釣ハ柵卷亦遠ざうんと思ふも鹿は輕
 之徒然ら夕多き在街り走んくか
 欲るき是隱居らまぬやいん出堂を

無るる乃吾士とらゆり津僧は提灯持
 しくん徒亦ら左袒せ以嗚呼瞬と
 へき終ら所折ふきりねる世の口は
 へか心も泥雅と笑うるもや雪隠の
 踏板とらゆりふ豆下とゆぐ不佞と
 くまの所助四先生へ云くもやおん

せんせいのちかたのしるしをたづねて

ゆきわたる川に舟を幸す

跡の舟は海より来り

芦隈白舟題



廓中一覽

景勝第一

舊廓後當所紀原

天正より慶長に於て 伊城下は空なる所

城町と云ふは其の七町或は十に及ぶる所に

殿立や元和れ神より 伊城下伊城下 船橋船橋 輻

湊し永代大廓と云ふ今に瓢箪町と道程に

下西とより門あり永代 免許の地をいふ豊

をたぬる故院乃殿殿 然るに總持の方を照す

一今四方被館れ上之み所交 國懸乃
廣大なる何をのりての報謝一とありき
也恐は怪しむ一

近世曲輪之跡

五十鈴川に流れ流く田海 恩澤は海に松
風は音え万葉紙流小津代と成るふ所い
日小橋来み海て乃繁花正保慶安の比す
又当地に集令して又廓造立れ 許命又は
事實瓢箪 蒙里往來人門不ろ出入するが
町々あり

廓と号に又此地裏尻市街乃界は壇城
らしとこれよりして曲輪れ文字は用ひきこる
此地根本に故実とに新に造立れ市街るは
俗に新町と號せり

大門口 茶 蛤門

沿街造立れ始まは西にむりたり日長番
人を金鎗戦表はして焼火厭ふり門和
立賣垣有裏町小浜町 俗に 山本町と接り
糸牙寛永の比東にれ大門口 許命あり

西横堀孫右衛門町辰辰町順安町通り紙
紙と付く者還老群集紙なせり古保十二三
年此法右原町大門口を蒙許命保之長江
守和島町南小江江受寶曆四年此立
賣堀失火此後新立橋町大門口之の 許命
有て立賣堀助右衛門町小江直に大川を筋まぐ紙
及門冬佐渡橋町東口大門口より右原町を交
寛文六年午十二月八日新立橋乃旧宅より失火とて
其後消火の便なし為小橋方大門口 許命有

古に貞享元禄の法ほどなれ従出し有之多
許命不許物附圖了り右原町始造日瑞方通
路自由なる一昼夜往來十合み後たり正徳の
比一街くの界は街小門有古保九年乃失
火より小門再造也又拾門と云稱を新立橋町
立賣堀失火乃附火であつて口一故拾門と稱
本町の承應五年中狼藉者なく紙捕るありて
長道具鉄刀等 許命有古保九年の
失火より東西大門口は之を灰

瓢箪町

道頓堀乃下に在りて
依り元和此始當所移り本村屋又治部町に
又しやうし町と名付し又又治部町本村
長門の乳母を本村氏より又治部町左衛門より
拜領此令の河馬市の瓢箪を賜しより街はあま
瓢箪を採家跡小姓は文字採りて言ひ
傳ふ天和年中役系又故跡ありて此終に傳
還の通路自由なると通るゆゆと稱せり

佐渡島町 又 大東新名

當町を寛永十二三年に治まじ上増寺町小
姓館より小具此也當所引移り佐渡島町
家系より姓採りて町名とす又大東新道と
呼ぶは當町大門口より本丁西右原町、出る
路なり寛保之四年に此家之依り新道とす
越後町 兼 阿波産揚屋町

佐渡島町の大西揚屋町一丁の古名とて街の
小門有りしに寛保九年失火より佐渡島町乃

支配となりて加^しを關^せらる此町河波橋^に揚屋^を
町より引^き取りと其^の年^々不^詳

藤原町

當町又海^邊藤原より正保^{慶安}の法門^橋り
又^字法^門橋^と右^原河^と書^付り又^是法^門口^に
新^家より引^き取りし者^を去^りし也

新庄橋河

新堀町

元和^{寛永}永^正法^河波^新堀^{より}引^き取り一^筋二^名

有^て上^の町^下の町^と之^を上^の東^町を^けり^來町^下之^を今^大橋^の町^と之^を一^に宝^永十^年中^大橋^新之^を橋^町西^を新^堀町^と改^めし^て之^を傳^へ又^之賣^橋河^波
橋^を揚^屋町^{より}引^き取りし者^を去^りし也
上^は五^曲橋^と橋^を

九軒町

此^所花^街の餘^地と^て者^を同^名か^り雜^居せ^り
方^に商^客來^集せ^り日^毎紙^振き^らる^揚屋^を
橋^を引^き取りし者^を去^りし也
飄^々軒^町お^り

東の江島は往還のる所飛騨揚屋町と成り時代不
 詳なる故に尚時よりして町役たり又九軒町と
 云ふ事九軒有に故に付ることありとも往者同
 五十二軒ありし町なりとい町ありや未詳又
 故町といども五曲輪と申す下知所更家といふの
 ぶら

佐治屋町

當所は九軒町の西に接して餘地あり九軒屋安の
 比高麗橋筋佐治屋某物領の地とて町名分明

たり其は立賣地宛喰屋に在る門入道宗南院
 居家舗よりして支配の度又は其地を其より
 今も瓢箪町の支配と成り宛喰屋に立賣地と成
 るのみ強かり

木村屋系は糸道趾

瓢箪町系より三丁目小側當時標屋某
 龜屋某の居後れ地たり享保九年庚申より
 宅を配當せり其已親者白人惣といふも其
 してお續と

甚姫遺趾

右西隣當時大竹屋某住居此地なり甚姫の寛文
の比新屋清春とらひて居りし家合あひましく
元朝新養此條の代りよ甚姫を以て経堂を收納
せりとのりて採り其末今も在り

佐渡島助右衛門遺趾

佐渡島町東により一丁目十字街西小隅より
二ヶ不同の家今大坂ありて門懸の家士れは画り
町にて佐渡島助右衛門とらひて何所をく家士屋

と好をく正徳の末享保れ始の比

松宅

新庄橋町土橋西付く小側灰屋某宅今在居某
此よりある松樹有焉とて同軒偃蓋九二十間
餘圍て松中より此松正徳元年四月八日
立賣助右衛門町竹屋失火に燿ぬ必俗竹屋失
事ともは月八日燿ともて或は云く亂筆町
右屋屋れ松ともて未詳

串童宅 又優宅此共同

大松中まきれる南西隅に白く水道の側まで此宅に
宝永の休辰本や某辰辰初て膏りしりしとて
串童宅と名付尚の東側とすなり

岸本宅

八優宅の向ふ東小隅に中まきの宅あり若し

横町より出入ありりり依て岸本宅とす

幸屋宅附丘宅

右原町又西 佐後島町辰本屋字子 小倉新倉

と少くある者 別入 別入 別入 西行ありまき

假丘 ついで ちるが故よ山中まきり庭中佳景任
侵康樂殿口不及諺目不及瞬假丘 まきり
景景景景景景

瓢箪橋

寛文十二年西横河原慶町通り瓢箪町
よりけ橋紙架な高町の多分りしり新
在きし街をれを新町と名ふ因て信し新町
橋と稱して福園に通称とす今も新町
修構とすなり

片桑芦

新原橋町南側水道ある片桑芦を生る一
本と片桑ふたつづるいゝ一京保九年此火
又焼ぬ元禄のは一大家より探索しよむ
事有り其生る地証考よ夏に浮橋糸金町
橋上ル船運の橋俗云ナニハノ橋の海に流東の橋上野橋町仁徳天皇の廟
町筋に川橋に川接き流をて大海へ行くと途
支流あり此流をれを今もまき有

雜技淵

瓢箪町東に十字街西有淵今此屋
某宅乃新れ下たり但此屋今も此町京保二年此
近に屋某抱れ林屋室敷懐ひして新下流あり
やして眠ると大きなる麻桶入臨死をせりて
かづ流があらとよむあり

流螢澤

此名昔上坊寺町に有し町より有し今也今指
町に越後町西に横町西側乃水道此側と牽通有
は宅の裏より又依後坊町當り不極るよむ

い尚不授くる言ふ此如塵塚如るに濕氣蒸る
常より花るるに月を田舎と用いて此島
會せしと云ふ經も有

越中橋

龍鼻町通り今番屋某宅に庭水道の向し
九折町あり道乃と恒に側より川の礎有れ
ども一遊とて恒に縁しゆまに今地下に埋れ
あるをり昔又此命抱れ入ま越中門立法
はるをりしゆし町通り郡集をりし恒來

ありがたはるよりの裏より橋筋祭出せしと
叙し越中橋くよ

櫻桃宅内櫻井

元祿のはまてと近江屋某宅身幹して十抱
むり有り橋桃有て橋桃宅と名づくは
下は橋るありてとて清冷なるありと世人
様ありし信し水井臺も勝り此橋桃の
常時賞とる人多く幽艶の縁を常とほじ
がし一惜する此橋桃正徳元年立賣所竹屋共

道者橋町

瓢箪町東にあり一丁目十字街南入よこ町也享保七八年北はまど江東西の敷側よりごく局をりし小湊園乃者溜りと入込しにありし斯く有今漸にふ新築あり

瓢箪小路

西口大門の南に其傍たり側の露路をりしやうし町始りの北より北露地をり

観音裏

大瓢箪小路向い合せ北露地をり其由緒不詳不^い知^い臺^い北^い時^い祖^い母^いあり^いま^いせ^いし^い元禄初北はし重くそ併れ観音屋出せし^い種^い屋^い兵^い事^い敷^い多^い度^いを^いれ^い江^い武^い修^い験^い者^い乞^い求^いり^いて^い安^い置^いせ^いし^いま^い併^いれ^い又^い武^い人^いと^い大^い観^い音^いは^い八^い丁^い同^いの^い肋^い帯^い願^い寺^い境^い内^い観^い音^い足^いを^いり^いと^い又^い此^い地^いの^い修^い験^い者^いと^い又^い正^い院^い大^い堂^いと^い又^い明^い曆^い二^い年^い茶^い師^いを^い建^い立^いせ^いり^いし^いふ^いい^いる^い度^いと^い又^い寛^い文^い七^い年^い以^い終^い此^い茶^い師^い白^い髮^い町^い観^い音^い堂^い境^い内^いに^い遷^いと^い茶^い師

裏とらふがれを元祿には不仕出てふいふ
親音裏と改まじりや未詳

難波裏

瓢ふし町東大門口下小側 今小石地や
住居北西隣 の裏
あり貞享社比たしんむや某宅より付くる露地
ありぬば難波裏と号し又一段當地の者あり
下難波ぬて掃く時音ありまふ露地をれと
難波裏とよむいひたり

櫓裏

右原町天満と極りる町まごは當町内とて不
櫓有 但常
芝居 尚内櫓和字和島大門口あり
尚町、行當西半丁 二丁目 櫓筆町の裏あり者
三竹不れ櫓の内とて其まへ不とる路の裏と
て初はよ

親清産

右原町當町極りるはと此地低長川に瀬
末々橋上の銀燭水と紙懸き一登乘乃系
を杜親清あり具造政後とあり地火の

多分抗て宇和島大門通當町れ行あるなる
の側より其影を止む

藝文の第一

夕霧艶翰

了

瓢箪町扇屋屋某 夕霧軒の抱しと則艶
翰其家におおと夕霧を寛文の末延宝に
比のたましとて死後顧老葬送流立流し
し好まむにふるまひり下寺町淨國寺
郷に出揚し墳墓とて花笠芳春と記名
津志大日

午正月
六日亥迄

吾妻自画賛

佐後島町家士屋某 勤王島遠趾ハ 抱のたましとて
当地身法の権輿たり 従者二百兩に價を以
て恩賞とて今も河原藝に身法之百兩に
不之當 岡川色那 和名類聚に出 山本村里 和名
出群侯村の部に出 揚隆志郷を編 坂上とはたしとて大庄屋身法
せしむ 則とはたしとて進趾當付西本殿寺門下此道場 自画
一社も表はれはるるにたしむる所とて其賛に云

身をたすはふいぬ名をありし

宅に居りてふふ本中里

此一軒と云はるる遺跡西宗寺より見ゆりし
吾事其の寛文ははのたまふり云はるる丸形町
揚屋并行屋を命をよめよい并を命は者
を修繕して青苔様を製造せり金具は文
は定規二つ柄を用いて花法堂の整頓せり
其樓今と片り

細見園 一卷

は書きたるんを有るべうんべ村後と居るが廊中
をとるる

遊里末末記 一卷

貞享の比嵯摩教人曲輪れ、膝とらけ嘆て

此書は作と

雨表同答 一卷

日人乃の形やる雨 契機 六十どりの位階園を綴

アと笑書と

杜撰年代記 三卷

何人乃伍を去るに杜撰れ甚しきものなり
呼ぶ

評判

毎書教を去るに深く採るものなり

舟舟過去帖 一冊

佐渡徳町丹波屋某抱のたま時代不詳此
書舟舟曲輪を去るに妹女舟、若若界也
乃れたまに去るに教訓となりて
書をり今も去るなり

届文

標客を便侶門より去るに乃れ技を
買しとに先の列深乃れ今も去るに其
由を告廊中乃れ例艶穉綺言千變万化
乃れあり

歌を舞く事

色節曲

承應明暦時代のくやうくをり寛文十
二子し年之暇屋夕暮系より出るなり

船中れ佳景の時元曲と云ふ其の
古今の歌をまゝに曲の行律今に傳る

知様踊

其は元不詳盛に行き江文和貞享に
始めて元禄末に終り是も紙二枚より
本偶人初抜具合紙の中馬の尾紙に通
し双方乃端紙拵膝の上置弁の合を
手拍子毎具幣本偶人踊家方り
細を付 足紙やるれどりと様と

大會踊

往者大も踊と云ふ八月朔日より十五
日まで客れ多果より三五十人乃至七
八人十人末まで又六人終り日紙拵
て揚家乃、片奏して打のり踊紙借し
二十人終り入替踊を紙を立地踊
し江殿肩帽子さし帷子玉羅紙羽織
衣袴紙腰子奏付印籠巾着かききき
拵て踊り終り仕組踊者中にも十人ほど

ぼくはしつ乃抄ね奇れ明衣なり佐渡守
傳八令澤五平次多其勢の風流と付
今宵は何屋乃大寄聖はあま何屋と
毎夜く乃大よせと一乘も願わたり
又門下踊るを丁内の五十字街の関
り江右長持はしつ人を揮との
路中を燈燭着あはる水くすく
素重はゆがふとく乃支倉負兼兼
明れ踊るれば長持はしつ人を揮との

げばあしつ男あしつ女あしつ
あは酒らとらりつ一守保九年大
み右長持はしつ門下踊る終る
まの保の末元文はしつ偶は右長持
を獲べ園とたりつ一守保九年大
けまはしつ編らりつがくを
より四地ありとらみ踊場はあしつ
ゆりてうらとら乃踊るはあしつ
入の志輝はあしつ先後を争はしつ

梵万智中... 紀原の年... 例年あり

三勝唱歌

當時廣橋... 乃唱... 元禄...

屋京踊の音... 是れ其の京檢校... 要は...

桑禮柏子曲

寛保十二... 例年... 画...

尚あり名細く堪能人有りてこれ
講の文句は附三法之字一紙を教様
乃おめて難ま行り此紙大坂中紙を
桐子に檢通して満宗夏糸禮の宗燈
ささの小壇尻まで桐子方を附りやう
なりけり松の花燈數十流強くと
糸素難ま乃沙汰終り

妓品分四

右史 附 出世右史

醍醐河守江口白女一条河守蟹島
宮本は一条河守蟹島如意河守
江口小氣音河守神河守孫河守
河守河守上女茶河守乃氣高倉河守
神河守根黒後島羽河守江口桂本河
女横橋亀菊等尚因名るに桂本河
娘のむい君のむい本庄お堵して孫
堂上より出され難有河守河守一乃
孫河守代乃 執撰乃自集裁是より

相繼て多かるに思ふれども末代に於て
身を賣業しかりりし一古夫れ終不
詳不始後世ま枝の極む方ねを按み
職原抄み彈正平大納言の淺官侍
史古夫と謂古夫力こと訓とて頭とらふ
の意もなぞとくもいふ事なるも又出
古夫とらふ者より今もほくして所
遇つ昔も秀才と撰で古夫とや一近
代い艶をのり紙よりして古夫とに誤りし

つらばし一古夫乃中より古夫みななる
大きな員事と寸職原抄み謂ふは
五位下叙也階裁入内勳文假令近衛
右監掃部助ハ六位也五位叙をねをた近
古夫掃部右夫とらふは六位とらふ事と
又位乃叙爵とて大きな叙擢とて侍
しと出古夫此意めしゆるべし又寛永
の法南朝書日れ社家富み来り能く教
を真となやみより能れ縁語より古夫と

と出づるゝゝの長飛をう様樂家は夏節城
に於會とる事知すべし或は樂舞に依て
おまゝとて記なきありあはる秦淮士女表曰
明乃神母そは女奴樂官列たりて纏紳
たま乃宴み侍り此記日本新樂寮とて
記すにとも 神樂舞 舞馬 長門 具事
い何れとも 音 味相違り又下殿の詞
うに 御 今河原藝芝居れ沖めて艶を
者孤一家に願となりてたましく唱へ入たま

本とてふある於此司となりて
大夫の御座りたりに侍りて夏も姑
の氣爵世人善く知る所なり姑合不
天柿附大小見世
おこれ價枚み依て此品目をたせり多所
異有れども 御 名を不致大小見世も其
價枚乃込付まよわり
鹿 子位
其義不詳圍乃文字よよりて諸経皆

とて採り不足

和氣

古銅を錢目二つめと價の異名とに故に
分ちる紙和氣と文字の紙幣或云紙幣教
ざしる紙幣とをねばは医家乃姓紙幣
て和氣と書と世俗五分取と云

新造

和氣の依言をあら出さるなりと書きたる事
可有なりと紙幣なり紙幣ありと云に造る

ふれ綴語みじかに新造とて書付し
又李白詩み借問漢官誰得似可憐飛
燕倚新粧と云みよひて此をたねに新粧
と書て若一のふとまき

若衆女郎附分枝

寛永ははらりし町大和屋果抱し市
之座とて系似城有髪夾立み結白鬘表
着しぬしぬと母に出せぬ若衆女と云と其
よりお徳と阿波左上の町

今の新橋町 新屋京

抱内蔵の如く杯をさるる若衆女郎なりて大和
 貞喜は比百舌屋近江屋などつる御城也
 若衆女良乃表着てききたよひてこ経紙
 深女良を置二人の香火を付けて出せり此
 の中に舞などほり也右女良何曲をさる
 交りしに及紙屋京れ抱の香火勝て至り
 つあり生得拵裙よりふたりと舞よよひ
 舞子となり一右女良如く舞女良は活て
 出せり客の如く志すはははほどの時一豆小

随つちお終て諸家より経紙業
 客の如くは女良出外より舞女良
 とは成りし何の活より舞子となり
 とは成りし客の如くは女良出外より舞女良

月影夜

一二三の價教よりとて此女良より近江
 終り

引舟

大船進退を助とられ義より出せり

離妓
 往古六波羅に不嫁たり吾付係り妓氏
 膏信する者有ればと答則應に定
 妓のきよ紙をとも元文の法もどけ編れ結
 みて緘懐み入る歩行しに迫り奉八櫻成
 船に括りおめてくると故より紙痰失を
 此編に故代長持入ると筆舟狭公言たり
 編たり小天神已下月紀汐の頼八局り
 筆舟狭公相鏡臺まで紙鏡を又書する

故小天神に下付係り離妓に此編たり約
 束れ日柄より出る日れ妓に付係り離妓に役
 に出るとる道中の時とく後常とん
 使をし主人の内より住持れ日離妓の使
 系常とん出るとるは故実迫は痰失に
 香車
 妓院辨要の婢を了る未詳
 妓院の第五
 傾城屋附忘八女郎屋

似城乃文字舊く世人知らずなれば注釋
を待て忘八と書け按に類書纂要云
忘八言人入于花押之業者其公已忘
却孝弟忠信禮義廉耻之八字云夫とく
は月と訓どるぬなり又曰書小鴉也を出
たり注鴉乃山中之鳥有雌無雄專典別
鳥交合言唱家多典外人交合正如此
鳥女をなすらひ習りて成考し得た舟と
よび君と名ひし由緒ありは上臈れと

能^レ用いぬりて^レ又^レ即カ當及官名
と^レ親を下^レ許免の地れ^レ在女たる^レ久^レ女
能^レく^レなして^レ不^レ若^レ死

茶屋

傾城町草創の時より今又相續寛文九年
奉蒙^ニ許命貞室三年株れ^レ扱九^レめ^レお
定^レ免^レら^レぬ

揚屋

揚屋町^ニ指^レ不^レら^レ紙後町^ニなり阿波^ニ府上下

九軒町有る古代より有る人とも先代後
町をさす年重なる景徳の廟とて可考

兼見五

万治寛文乃此と云る三月朔より十月晦日
迄七霜月朔日より翌年二月晦日迄
世なる一十月のちより晦日迄七年中救世
縁とて懸念を成りしをたり正二月に救世
毎年極河願より極河延寶三年依
許命元日より十月晦日まで救世を
お預け

河内郡より極河の向ての登りより
登りより大門関りやい年中救世なり
志は享保九年大坂火後奉蒙 許命

六願子 附 寺願

類書纂要云生理を不務人人家に
とて寺願流傳中の願はて行きて
文字此もも候ふといふ
有り尚不六江子に権願
二九

高尾の山に正倉院なすれの蔵をたらしむるの石室
其名をふる一宇治の屋敷八雲踏屋を日巻也
後と湯正下元方昭師忠右衛門持右衛門也
後後其名は外を新每鼻祖とてそよ二たる
右まきでたれは徳也真似は板屋をたらし
同者らるあやも八雲と湯もふる一宇治の屋敷
名をり上代とて新科とて少事なり宿より録
賜りし又近世の拍ねとてそのをぬやうと
成りしをそそぐは切の花代を記得とてやうに

如くぬ嗚呼古格れ瘵失すもとや
行事の第六

紋日附 表着二日着三日着

紋日よと認有具足能味考紋日紙通開
文字とて蔵中行なれ日紙指すのみ
許命れ持女をれは禁色を云禁色を云御也
なり表着に用ふなり傾城町乃親換とて二
日と云三日と云とて五と云カタの日柄の
内とて二日と三日とて二意と云て此カタと

約ヤセー顧かん老乃方かたより好この事こと紅衣こうい裳しやうと製せい衣いセ
剛かう深しんの妓ぎ小こ送そう系けい具ぐ衣い装さう毎まい日にち上かみ下しも着き習じゆ日にち
衣い装さう居ぐ乃の返へん具ぐ乃の全ぜん盛せい々々に此こゝの今いま古こ
不ふ易えき乃のり
カクモ

傘記號

長なが柄がら此こゝ傘かさと官くわん家けのゆりて傾かたむ城じやう町ちやうの是こゝ又また
祝いわ様さまとの晴はるぬ乃の別わか有あるを道みち中なかにありて
ふたり王おう人の紋いづめて具ぐ家けに別わかり
門かど立たち

天和貞享乃比ひもぐ有ありて元禄末もと終はり

大また天神運長た魁けい

傾かたむ城じやう町ちやう導みち創はじめれり傳でんもりて正徳元ただ年ねん
四月八日竹たけ金かね火ひ水みづ糖とうね具ぐ後のち享保二年きやう再また造つく
せりは元九もと年ねん又また板いた火ひ正徳元ただ年ねん再また造つく
のまら長なが魁けい運うんびと下した人ひとに傳でん有あり

字あ通とり

字あ通とり分ぶんのり

喚あ迎むか女を

五言のよみ不^な沼^ぬ解^げ時^{とき}の^ま家^かの^ま新^{あたら}造^たる^る中^{ちゆう}有^あり
ハ新^{あたら}織^お終^はる^るは^は兼^あ約^{やく}の^ま婚^{こん}家^か、^ま雜^あ妓^ぎ来^きりて^て上^あれ
女^めみ^み糸^{いと}心^{こころ}と^とは^は耐^た上^{じやう}乃^の女^めも^も支^し度^たと^とて^て妓^ぎ院^{いん}迎^{むか}
に^に行^ゆ其^の女^めも^も上^あれ^れ女^めも^も馳^ち某^あ附^つ派^は倡^や門^{もん}の^のま^まに
回^わ終^はる^ると^と依^より^りあ^ある^る是^こ上^{じやう}れ^れ女^めの^の勤^{ごん}を^をり^り今^{いま}去^こり
ど^どう^うと^と

七夕^{しちせき}立^た花^{はな}

承^う應^{やう}の^の比^ひま^まど^どい^い例^{れい}し^し年^{ねん}七^{しち}月^{げつ}七^{しち}日^{にち}衆^{しゆ}妓^ぎ自^じ拍^{ぱく}と
是^これ^れも^も向^{むか}と^とん^ん甚^こ賑^{にぎ}お^お事^{こと}ぬ^ぬり^りと^と緒^{いと}結^{むす}ふ

寛文^{かんぶん}の^の比^ひ終^はり

三月^{さんがつ}花^{はな}市^{いち}

瓢^{ひょう}箆^{へい}町^{ちやう}东^{とう}口^{くち}の^の一^{いち}丁^{てい}目^め十^{じゆ}字^じ街^{がい}左^さ右^う側^{がわ}も
揉^も挽^ま花^{はな}の^のゆ^ゆり^り花^{はな}を^をど^ど毎^{まい}と^と年^{ねん}花^{はな}乃^の市^{いち}を^をあ^あせ
己^{おの}允^{のん}四^し曆^{れき}乃^の比^ひより^{より}例^{れい}年^{ねん}之^の日^{にち}月^{げつ}の^の間^{あひだ}賣^うま^まり
予^より^り花^{はな}雪^{ゆき}紙^し又^{また}そ^そる^る吉^{きち}野^の山^{さん}を^を新^{あたら}く^く終^はり
あ^あや^やし^しと^と昔^{むかし}人^{ひと}乃^の名^なを^を感^{かん}吟^{ぎん}と^と

門^{かど}出^で興^{きやう}名^な應^{やう}

此^{こゝ}一^{いち}件^{けん}今^{いま}古^こ不^ふ易^{えき}れ^れ風^{かぜ}俗^{ぞく}を^をり^り身^み持^{もち}り^りも^も

より若衆首尾克はくちて曲膝は出る
斯は門出とらふ妓の時金ははる倍半技を
ど原會して御座出る事たり又傍ま妓
より其の乃賊別和分は贈答書有り
幾句指のあめを祝かふは伸駕の花産主
家は宿を以て差別有

顧老に贈小油

住昔木村在越中其田後西ま有と歸心家
くぬがしみ日柄を後持て歸心後まで餘客と

はくちめさくちて闘争出まらねは双方何
まへにても客は狂重みよりくちくちくち
濁衣の二布縫白より解紐付て西まは贈
守て上取の言可見今般も濁衣は言と
一身み添くぬがしと帰帆有れとて何ま
も不見る言は飛西まは伴の濁衣積鼻禪
かきと帰帆を此よりとて越中積鼻禪は紀原
しめる更み越中其國の制衣みあはる當所
下は綿絆やれお新よ造裏よ馳別れ詠奇

方ど誌て送る事とはなりぬ又同文書として
總枝自ら書れ和奇文章をどかして帖と
るしおろる又色紙短冊をどかして書とむ
其外物をもどその尊卑をわたりて差有併進由
に餘ゆれば贈る交昔と差とるも時を
不及可也

高舗 第七

右史白粉

瓢箪町通筋式丁目京極左近製衣とるまの

長崎寄定紋まど紙改刊行して粉匣中紙
て賣とる者らるるまよむむなり

席屋油

瓢箪町東口大門左隅招牌と虎あり
家とるま紙誌紙一切賣紙製れ方みまど
ま紙とるま紙とる

阿万膏素

天和の比佐後島町佐月屋辰屋門とる
医道も通達とる者有具は殿実家れ招

に應じて痛は瘰癧なり後らり没後未亡之
乃秘方を傳へて疔を愈と膏を練膏を
阿方ガのみ多りとも故に阿方ガゆくと
遠途買來者日長おれはとて
長四餅

佐波島町大門に傍に餅屋長四餅と
名製をして長四餅と名づて天和はよりお
續して迄とてはまどびんごや傳をらとてい
まらしに尚時とていなり

信濃屋若菜麩

瓢箪町三丁目東隅とるものや菓とてそば物
を菓とては寶水と徳のは登りてて幸保の
失火後流経と

女印饅頭

瓢箪橋 西結と小片は搦賣世俗物
町橋れよのゆんごうとて寛文のはが賣ま
る

阿澤菽乳

依後清町あり二丁目十字街西隅宝永
 十一年中八百五拾五番とあり其叔乳を能く
 其有るは其叔乳の依之清とありて頼叔乳
 とあり妻阿保其弟阿保とあり阿保は
 とあり甚能製てま水勝より不故に澤の
 ありて其子とあり清享保の末没
 其名も其の終りあり
 三社擲錢
 新町橋西結ちげざん之社と云俗名は後

験者有るを清勝院と号一錢を投て其
 を占高名をとりて斯く附と

故事第八
 局門幟

賤校は之所局とあり其考一書に之
 其は之塞ふれ門幟は官家乃免許
 得るは之塞ふれ門幟は官家乃免許
 の布尺は尺三幅縫分二所其掛子單は凡
 結有り中は末代不易の許命と得て同

ハ登りて各々入りてあつて其の如く出づる者も
限を敷をうらふ門婿家より行く行燈を
とり入門戸を閉りて局には火鉢を垂き
衆を凌ぐに顧客恐未帰去せん其意失
とよむ其の如く退出せしめたるに其
時此所入のし客不残去られ其路
享保火後火の用い無しとて炭火を禁
らる瓢箪町頭町よりふより袋町へ
左敷撃初と其音は彼等傳へて餘町
退く

沼の刻限氏告

上吉紋出

元禄のはすどに折る者後出ふ付振る由緒有
倡之房主家みんねをそ作は有申

親進左敷

瓢箪町二丁目十字街より西口入門の外立
賣垣の出るゆへに親進左敷あるといへり
劇場乃替左敷ありて打止申緒あり
竹本茶をま劇場に左敷撃之去流とてその

とある寛文の比とて完喰屋ハ之賣屋格
多に海張而已

瓢箪町通不立端午熾由未
故傳諸没有未使姑置而不論

衣裳着

例年猫月下旬には毎妓院へ行交なり
突ハ改良妓より衣裳を穿也又ま
下離枝まぐり列して其品を穿る者ありて
佐江ハ家より風有て其論不一日故とて

〜に藝で

新話第九

朝鮮人來曲編

寛文し年中倭邊より漆屋正方とらる人
尚不新橋町は松居新橋町ハ今ハ河波下ニ町
民屋東條松居正方ハ此方
が妻者中花清門東に遠後如くして西原は環れ
孔者此故とて其は素那の朝鮮人ハ西方が室よ
宿てハ西方が妻者此の町新橋町今ハ河波
下ニ町
屋茶壽志み入と合事なご仕と其故朝

餘人素明有りともども正方々妻夜生れるは似
町は大門園了ちて異國人は往來を禁じ正方が
妻没後尚大門園了れは法なり

郭下方言

元文寛保ははまどい古風遺て是亦風俗ど
庭をせん風者田舎を兼ぬ京屋はゆかへは
屋を町林大和屋紙相列ふは屋をさんさ
たぐよむい用いし今はあむれ
主人乃江字と取合て呼ぶみたり是亦

故風とて顧老を伴ふら女を上り女といひ
も回紙勤忠を下げ申らふ通年町は女乃
揚あり下女どもをこに入込申はは
顧老の方より下女を伴括しは
ぬりて古語は失換ねく愛易し
ども

性者雪端雪筋基由来二齒下駈

姓女に履履も若る雪端雪筋基由来二齒下駈
を元録はは原本屋果不由ありて

此の草履下駄に代又新造など長けりか
申すも二箇下駄を踏し道は異體れ
仕出下駄發行と申す多しより此
の低下駄は二箇下駄より多し

似城町障

元禄年中新原橋町点屋京收是障一辺
有共法江列後架れ郡之井寺よりあり
志不讓即一辺を之井寺の似城町は
障より申す名を奉りて之を裁と

綿屋六七番門

瓢箪町西口大門少く東面が日綿を打
綿屋六七番と申すの者何れ申す
て人あはれ申すは通稱と

大内葺

依後橋町二丁目小橋町葺屋は七と
箋町或丁目街頭小店は梅白い
賣元来茶をぬ金綿屋は水一
くくはせりといふ中又内葺は

ちりき保れ末元文の初段で高名は信也し
諸店之内善賣子やうみあやうや高名は退
て今れ信也不詳

夕霧伊左衛門事實

夕霧み治舎やう孫を伊左衛門とてう人の戯場
乃劇文と書てう久し人なり劇文我又右田屋
本なる方うて河波に顧老に両説有依て累
川魚伎より一伊左衛門に初代坂田屋十
りし中

梳久事實

梳久より別れ人者戯場は信也し久と瓢
多し加志久の附舎信也なるものなり此のやう
かしくとも或段実家の果を敷發して信也
片膚段然枝の先よはやう多人を結し付門よ
立て今れ信也下女通れつうう何を信也は
とつし信也内よ入る輕にやう扱をいつて後世と
寸除來れ豆うらやうは玉屋庄七とて後世も
長左衛門後名方れ顧老なり附舎やうは戯場信

若れ後めたり挽久と別人たり

助六事実

名氏不詳観場れ劇文なり

備前屋清川事実

佐波崎町伎前屋京抱清川と厚合文七より
夜とる夫と清滝とて卑品れ妓たり
等て川原伎と用白清滝ハ元禄年中れ妓たり

京屋阿琴事実

元禄比佐波崎町京屋京抱於琴とる天職

有通世一と浮屠と帰依を具は家系より
能時と振き一に賑下げて於琴とる合せし
を識よの若れ先八歩よりの上不潔内人
より度をとる

似城賞

夕暮を川原伎め新組坂田森十ら伊
清つりあうて紫縮緬れはる落く
川原伎と似城買れ段をほるものほ
落く頭巾を着着換とる

掛小舟

元文れはまどハ川舟船技上女入門りゆで
顧老を逐らぬ出る事と平日とんまの機
嫌悪を顧老陽気み付はけぬ友者
此受迫代絶多り或宗通れはどきまに
きやくほけ小虎屋れ店に掛小舟

格引見世

右支れ通号を格引と云ふ小玉種年又毎
とんまのり

丸屋小舟士受交

室永正徳に比丸屋小舟士と云ふ右まあり
道中へ出んと云出ると別猫小舟一が衣被
れ船に咄付不部小舟士ハ因縁と云づく
有るけし氣付て並に相帯とぬ終る海場一
て飛人の船勢とぬ料紙現をて出と云
和舟船籍を書しとぬ舟中不愛意
遣る顧老より贈答れ和舟連飲れ附合るを
信して還る真不真とぬりてきやくと云合

遊ユウ程テイ乃ノ更マシたりラ狂キヤウ氣キをシてモ吾ワ好コト道ミチをシに斷
と精神シム止トまり也ナ

丹波屋井分誌

丹波屋井分タニハヤシノ名ナ 文和貞享がつけし一月揚結は客ハ
何ナニとシて一年ニ之ヲぬく今ノ也ナ お終り

繪屋吾妻好奇

繪エ如ニあらじま ま保元文の比の故 古コ異イ風フウ紙シ好コト發ハのノ田タ前ゼ
画エに解括クツ紙シ子シ仕シ立テ衣ヘおお離リ妓キ書シるル籍セキ紙シ
持テりて近チカ代ノ異イ妓キをシるル

大坂屋洋茅生結

大坂オオサカ屋ヤ洋ヤウ茅マウ生シ結ケツ
大坂オオサカやヤ洋ヤウじシぬヌえエぬヌ言コト中ナカ一ヒト全ゼン登トウ氏シ好コト妓キ自ミ
客キヤクをシ換カてモ少シとシとシ 是れおと

又次石碑

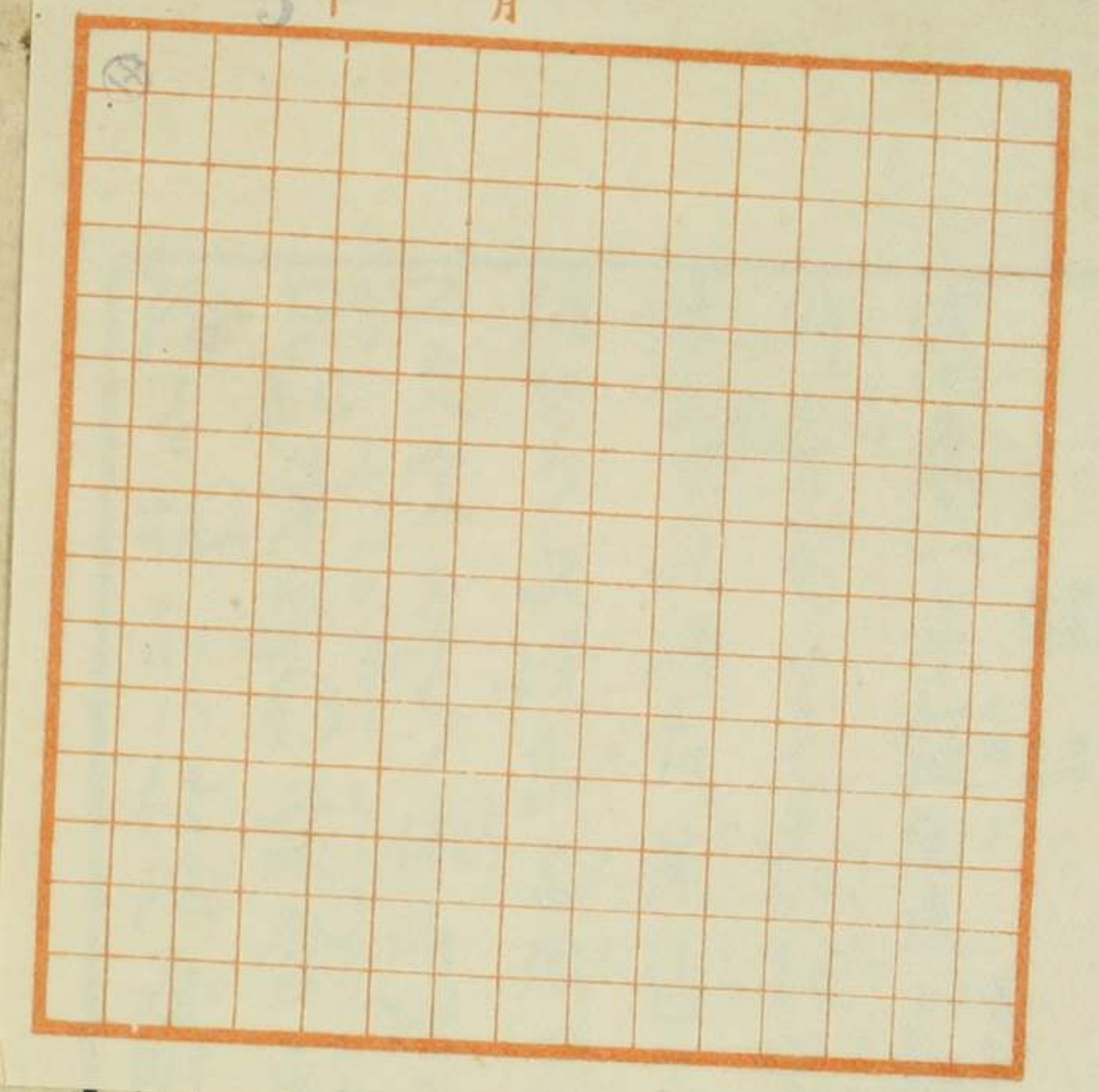
下寺町洋玉寄み有
又マタ次ツギ石イシ碑ヒ
下シモ寺テラ町チヨウ洋ヤウ玉タマ寄ヨシみミ有ア
又マタ次ツギ寄ヨシ進シム唐カラ戸ド附ツケ石イシ碑ヒ

大淨園寺本末の唐戸の墓マタ極キョクれ寄進ヨシと新屋
大オホ淨ジヨウ園エン寺テラ本ホ末マツのノ唐カラ戸ドのノ墓マタ極キョクれ寄進ヨシと新屋
清シヨウ春ハルと誌シ

廓中一覽畢

拾遺

年 月



云元初比又法良
乃加地中分之二
案内と具法又文字
高利りりた以漸造立
造立ヤあつると大
三き代指して今爰又
分票紅單小語の辺をり

みまを法く 大坂新町細見 一冊

廓のおろろ名廻旧跡 故事ら以て是れ也揚屋屋敷庭号 一冊

凡 志 三ツ切懐中奉惣名よせ 一冊

此事ハみまを法く後篇より 夫と云ふは引取禿女節巻 一冊

同 二 三ツ切懐中奉 一冊

同 三 三ツ切懐中奉 一冊

享和元年四月 新町西口 富田屋利三郎

浪華書肆 心齋橋北詰 和泉屋卯兵衛

播飾万津
全加藤
州文
西

拾遺

拾遺

蛙沼

寛文六年録田氏日記云元禄初比又改良
許奈有々て郷比沼乃加池沖方之なる
陸出て又改良先述て案内と具沼又文字
強やり又改良与風之商判りたり大郷造立
の文字なり依此地と造立やわらると大
日記幸乍約落学述き代始て今爰又
附と拾ぬハ佐後屋町分瓢筆小語の辺なり

みを法く

大坂新町細見

一冊

廓のおろろ名廻田源故事ら以是れ愚揚屋庭号
繪屋廓方南および榊不榊の法をを微細小なるを

凡 志

三ツ切懐中幸惣名よせ

一冊

此事ハみを法く後篇よりを夫天神引取禿女神
子志鼓持仲長揚屋系登車おき登まをを考くを

同 二 笠切

け幸不詳く内坂町なり
三ツ切懐中幸

一冊

同 三 笠切

け幸少の
新地より

全同田篇

け幸ハ難波
新地堀に之

全

享和元年四月

新町西口

富田屋利三郎

浪華書肆

心齋橋北詰

和泉屋卯兵衛

播飾万津
全加藤
州文
西

四
夕

